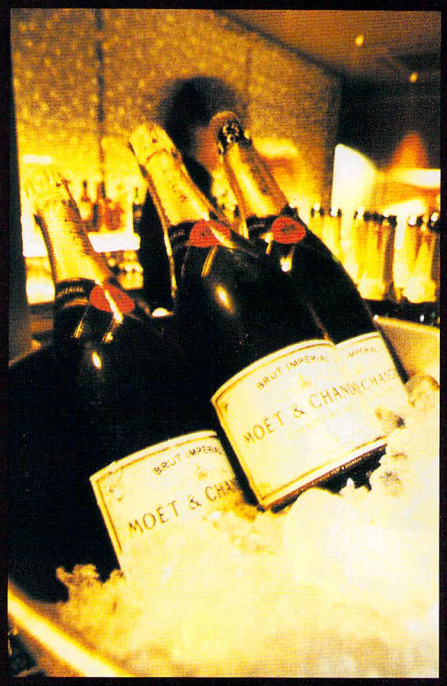
取材・文／竹中 聡　撮影／江藤 太郎

"LOUNGE" Rev. Openning Reception @HARI



バー「IT'S」グループの代表・長谷川さん（奥）もご来場。自身が持つ店々との共通項を得られたご様子で「大人っぽくていいですね。遊びを知った大人が来れる空間。シャンパン万歳！」。ご同行のかつやまサンは「スパークリングな感じがしてステキですね」。って店のこと？ シャンパンのこと？

「mod's hair」のスタイリスト増井一也さん（左）と奥様の千英子さん。「パブリーやなぁ。今後は隠れ家としてつかいます」とご主人。「個室感覚な使い方もできるし、インテリアもいいですね。オトナな雰囲気の隠れ家として使いたいですね」と奥様。おやおや、ゆめゆめ別々に隠れ家になさいませんように…

スペアの無い店。別名「偉大なるスキマダイニング」。意外な事実。今、「ラウンジ」と言えば…。

「ちょい不良ナントカ」なんてのが流行り言葉らしい。日本の首都あたりでは、彼らはチョイと着崩した格好で、利口に遊んでいるという。「へっ。スカしやがって…」と、斜に構えるのも良いだろう。だがしかし、彼らに使われる店に罪はない。例えば、東京都港区六本木6-12-4あたり。そう、例のあそこでは「ラウンジ」なるお席が、遊び慣れた彼らに人気らしい。

KBS京都×京都CF

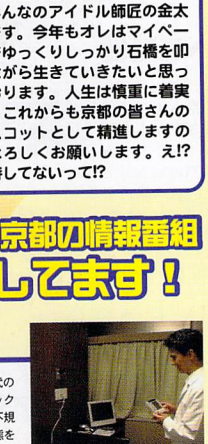
メディアMIX コラボレート企画

たに谷夜口 誌上

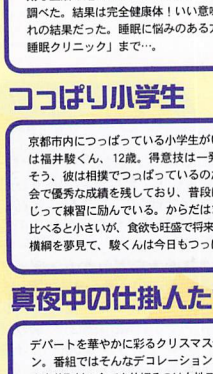
Taniguchi's Night

KBS京都 毎週土曜日
夜11時30分 絶賛放映中

谷口キヨコ



あけましておめでとうございます！心機一転！新しい気持ちで頑張っている谷口キヨコでーす！今年の谷口は違います！さらにパワフルにアグレッシブにディープにセレブに番組をお届けしたいと思いまーす！それから、谷夜ファクトリーチームがお送りしている谷口ファッションもエレガントにキュートにセクシーにやってます！私も色んな洋服が着られるので毎回テンション上がってまーす！HPでもファッションチェックできるのでそちらもお見逃しなく！



金太郎

谷口、テンション高すぎや…。少しは落ち着きなさい…。どうもみんなのアイドル師匠の金太郎です。今年もオレはマイペースでゆっくりしっかり石橋を叩きながら生きていきたいと思っております。人生は慎重に着実に、これからも京都の皆さんのマスコットとして精進しますのでよろしくお願いします。え!?期待してないって!?

ディープでセレブな京都の情報番組 こんなん放送してます！

眠りの世界にようこそ

日本人の5人に一人が悩みを抱えるという現代の睡眠事情。そこで緊急実験！睡眠専門クリニック「たなか睡眠クリニック」の協力を得て普段不規則な生活を送るテレビディレクターの睡眠状態を調べた。結果は完全健康体！いい意味で期待はずれの結果だった。睡眠に悩みのある方は「たなか睡眠クリニック」まで…。

こっぱり小学生

京都市内につっぱっている小学生がいる。彼の名は福井駿くん、12歳。得意技は一発目の押し。そう、彼は相撲でつっぱっているのだ。数々の大会で優秀な成績を残しており、普段は中学生に混じって練習に励んでいる。からだはまだ中学生に比べると小さいが、食欲も旺盛で将来の期待は大。横綱を夢見て、駿くんは今日もつっぱっている。

真夜中の仕掛人たち

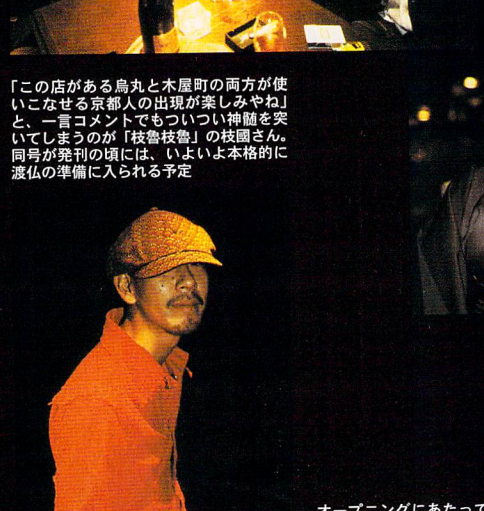
デパートを華やかに彩るクリスマスデコレーション。番組ではそんなデコレーションの仕掛人たちを密着取材！全てを仕切るのは女性ディレクター、平野佐和子さん。一晩の間に大丸京都店を装飾する職人達の熱い想いと技に驚愕！クリスマスデコレーション…それは仕掛人たちによる最高のクリスマスプレゼントなのかもしれない。

番組のHPへアクセスしてご意見、ご感想、応援メッセージなど、どんどんメールしてください！

パソコン http://www.kbs-kyoto.co.jp/taniyoru/
ケータイ http://www.kbs-kyoto.co.jp/taniyoru/mobile/

オーナーの森さん（左）と「cafe co.」代表の森井良幸さん。姉妹店の「花穂」もcafe co.が手掛けたもので、全幅の信頼を寄せている。以下、その信頼を寄せられている森井さんの店舗デザイン裏話。「カウンターの後ろは実はパチンコ玉。勝った分で作りました（笑）」。またまた、お戯れを

左から「松坂牛焼肉M」のGM森野さんは「手に触れるところがホテルクオリティというのがすごくいいですね」。「san-ai hair」の木村さんは「ウチの店も改装してもらおうかなぁ」。梅木さんは「ラグジュアリー系やね。エエ感じ」。RIJAさんは「森さんと森井さんバンザイ」。ありささんは「この店の雰囲気で和食というのが意外な感じ。好き」。「アズーリ」の中村さんは「久々に京都に本格的なラウンジが出来た」とまぁ異口同音



「ゴージャス！2次会とかパーティーでワイワイ使いたいです！」と言うりょうこサン（右）と、「凄い素晴らしいお店なので、お気に入りのうちの一つにしたい」と評したのは祇園の「クラブ綾乃」の関口あやこさん。何とまぁ黒帯中の黒帯までが絶賛です

「この店がある烏丸と木屋町の両方が使いこなせる京都人の出現が楽しみやね」と、一言コメントでもついつい神髄を突いてしまうのが「枝魯枝魯」の枝國さん。同号が発刊の頃には、いよいよ本格的に渡仏の準備に入られる予定

オープニングにあたっては、ビルの前もご覧のとおり絢爛豪華に。オーナーの交友関係を考えればそう不思議ではないのだが、「あの夜を象徴する、素晴らしく、嬉しいシーンだったんですよ」と、ご本人は大感激

「自分の店のスペアが他にある状態がイヤなんですよ」。先頃オープンしたJapanese Dining Lounge「IZARI」のオーナー・森さんは言う。同店を説明しようとすると、やはりラウンジという言葉を使うしかないのだが、どうもこの「ラウンジ」という言葉がしっくりこない。要は「ソファで食事をする店」だ。何だ、簡単に言えるじゃないか。深いソファにヌシヌシっと深く腰を下ろせば、自ずとテーブルへの距離は遠くなる。「食べにくいじゃないか」。確かにそうだ。それでも、そこをスマートにこなすのがヨロシイのである。焦る必要はない。ゆっくり食べれば良いのである。「回転率なんか考えてませんから。実際、滞店時間が2時間半を切ってると『何か粗相があったのでは？』と不安になる（笑）」と経営者も言っている。

四条烏丸のほど近くとは言え、エントランスはビルの2階。外から見上げてもシャンデリアしか見えず、それだけで回れ右する人もいるだろう。だがそんなリスクは承知。「危険と言えば危険ですよ、この店は。いわゆる京都らしいマスを全く狙っていない店ですから。でも京都市は100万人都市ですよ？それだけ人口がいれば、この一軒を必要として下さるぐらいのニーズはあるでしょう（笑）。信じてますから、そういうお客さまが絶対いるって（笑）」。

語られる六本木や青山、ラウンジという言葉は単なる記号ではない。文化の、それも最新の文化の総括を言う。その文化が、京都にあって何がいけないのか。この様子を見てもまだ、「スカしやがって」と思われるだろうか？